

# 2025年 関西元気文化圏賞 贈賞理由

関西元気文化圏推進協議会



大賞

## EXPO2025 大阪・関西万博と「ミャクミャク」

(公益社団法人2025年日本国際博覧会協会)

2025年最大のイベントとなった「大阪・関西万博」は、様々な課題を乗り越えつつ、運営組織関係者、会場スタッフ、ボランティアなど多様な多くの関係者の力でその魅力を引き立て、半年間にわたり国内外から累計で2,900万人を超える人々を集めた。万博が、芸術、音楽、伝統、技術が交流する巨大な「文化のプラットフォーム」となり、関西の観光振興と経済活性化に大きな貢献を果たした。また、その公式キャラクター「ミャクミャク」は、たちまち国民に愛されるキャラクターとなり、公式ライセンス商品の売り上げをけん引するとともに、その魅力が関西に元気を与えた。



大阪・関西万博公式キャラクター ミャクミャク ©Expo 2025

特別賞



提供：京都大学高等研究院

きた がわ すずむ

北川 進

京都大学  
理事・副学長、  
高等研究院  
特別教授

北川進氏は、ナノメートルサイズの微細な穴をたくさん持つ多孔性金属錯体(MOF)を作り、狙ったガスだけを分離・貯蔵する技術の実用化に道を開いたことが評価され2025年のノーベル化学賞を受賞した。研究成果は、青果の熟成を遅らせるガスの貯蔵や有毒ガスの安全な輸送への実用化が進んでいる。今後、温室効果ガス削減などへの応用も見込まれ、材料科学の世界に革命をもたらすと期待されている。京都市出身の学者が果たした快挙は、地元のみならず関西全体を元気づけた。



提供：大阪大学

さか ぐち し もん

坂口 志文

大阪大学  
免疫学フロンティア  
研究センター  
特任教授(常勤)

坂口志文氏は、過剰な免疫反応を防ぐ「制御性T細胞」を発見し、免疫システムが自己の生体組織を攻撃することを防ぐ仕組みを解明したことが評価され、2025年のノーベル生理学・医学賞を受賞した。研究成果は、関節リウマチなどの自己免疫疾患の治療にとどまらず、臓器移植をした患者の免疫抑制やがん、アレルギー治療への応用も期待されている。滋賀県長浜市(旧びわ町)出身で、滋賀県出身者初のノーベル賞受賞によって地元とともに関西全体を元気づけた。



©吉田修一/朝日新聞出版  
©2025 映画「国宝」製作委員会

映画「国宝」  
製作チーム

映画「国宝」は、任侠の世界に生まれた主人公が歌舞伎の道を歩む約半世紀を描いた壮大な人間ドラマを映画化したもの。李相日監督と豪華キャストによる高度な映像表現で、2025年11月には観客動員数1,231万人、興行収入173.7億円に達し、実写邦画の国内興行収入歴代第1位となる大ヒット作となった。関西にゆかりの深い歌舞伎の世界を、関西各地の伝統建築をロケ地に用い、地域の魅力とあわせて全国へ発信。伝統芸能に現代感覚を融合させた本作は若い世代にも歌舞伎への関心を広げ、関西文化の活性化に大いに寄与した。

## EXPO2025 大阪・関西万博特別賞



つじさん

大阪・関西万博では、SNSによる来場者目線での顧客体験の発信・拡散が来場者増加の大きなトリガーとなった。大阪府在住の会社員「つじさん」は、自身にとって見やすい万博会場地図を水道施設の設計技術を活かして制作し、自身のSNSに公開した。パビリオン巡りに欠かせないマップとして万博来場者の多くが印刷して持参。マップの情報は随時最新の内容に更新され、印刷数は100万枚以上に及んだ。SNSにおけるその活動は、来場者から多大な感謝と称賛を受けた。



中央線400系

大阪市高速電気軌道株式会社

2,900万人(関係者含む)を超えた来場者の輸送の8割以上を担った。中央線で2分30秒間隔(1時間に24本)の運行を1日12時間実施し、さらに臨時列車も運行するなど、万博会場へのメインアクセスルートとして輸送力増強への取り組みを確実に進めた。また、閉幕日には名残を惜しむ来場者のために終電を繰り下げて深夜に臨時便を運行。会場内でも、移動を楽にする、全車EVバスの「e Mover」を運行して累計100万人以上が乗車した。万博の円滑な運営に大きな役割を果たした。

ニューパワー賞



撮影：新潮社

い よ はら しん

伊与原 新 (小説家)

大阪府吹田市出身。富山大学理学部の助教を務めながら小説を執筆し始め、後に小説家に転身。2025年「藍を継ぐ海」で第172回直木三十五賞を受賞。同作品は、徳島県の海辺の小さな町でウミガメの卵をふ化させ、自力でこっそりと育てようとする中学生の女の子の物語など、人の人生をはるかに超える時の流れを見据えた、科学だけが気づかせてくれる大切な未来を描く、5つの短編からなる小説。日本を代表する小説家として、今後のさらなる活躍が期待される。



2025年11月29日 日体大記録会

く ぼ りん

久保 凜 (陸上選手)

和歌山県串本町出身。中学校進学以後、本格的に陸上競技に専念。中学3年生で出場した女子800メートルで中学日本一に、高校に進学した後はその勢いはとどまるところを知らず、2024年7月にはそれまでの記録を19年ぶりに更新する日本新記録のタイムで1着となった。さらに、2025年7月には、自身の持つ日本記録をさらに更新する1分59秒52のタイムを樹立した。日本を代表する陸上中距離選手として今後ますますの成長・活躍が期待される。



©Janine Guldener

ひ さ す え わ た る

久末 航 (ピアニスト)

滋賀県大津市出身。5歳からピアノを始め、これまで国内外で数多くの賞を受賞。2025年には、世界最高峰のコンクールの一つ、ベルギーのブリュッセルで開催されたエリザベート王妃国際音楽コンクールのピアノ部門で、日本人として38年ぶりに2位に入賞し、国際的に大きな話題を集めた。同コンクールは4年に1度開催され、ショパン国際ピアノコンクールなどと並び世界的な演奏家への登竜門とされる。世界を舞台に今後ますますの活躍が期待される。